

## あるシラヤ族の女性を通して語られるもの

迫田博子\*

### What was told by a woman from the Siraya

SAKOTA Hiroko

#### Abstract

葉石濤は於一九八〇年代末期開始撰寫出一系列平埔西拉雅族の原住民文學作品。他向來期盼透過文學書寫，展現出台灣文學の多種族風貌以及多元族群之特色。《西拉雅末裔潘銀花》の主角潘銀花，她生命中歷經了五個男人。不言而喻，他們與銀花的人生是互動的。但至到如今較少涉及五位男性之形象。而銀花深受母系社會傳統的影響；在族群融合過程中，她的思想是否亦會受到漢族的影響而有所改變？本文將針對這兩點進行探討。

Keywords : Minority group in Taiwan, Pingpu, Siraya, ethnicity, matrilineal society, Assimilation, values

#### 1. はじめに

数多くいる台湾の作家の中で、葉石濤（1925～2008）は最も長く文学活動を続けた一人である<sup>1</sup>。とはいえ、その創作生活は決して平坦なものではなく、辛苦艱難に満ちていた。葉は抗うことのできない時代の荒波に翻弄され、政治犯として投獄されるなど<sup>2</sup>、あまたの試練に直面する。だが彼は粘り強く生き延びながら、生涯倦まずたゆまず表現者であり続けた。

葉石濤の作品は大きく文学評論と小説、エッセーの三ジャンルに分けられ、自らの台湾文学史観を「種族、歴史、風土を重視すべきだ<sup>3</sup>」と語っている。中でも、四大エスニックグループが共存する台湾において、葉はひとときわその多民族性に注目しており、その思いを反映するかのごとく、先住民族に取材した小説を多く発表している<sup>5</sup>。短編連作『シラヤ族の末裔・潘銀花（葉石濤短篇集）台湾郷土文学選集IV』<sup>6</sup>は、ある先住少数民族（シラヤ族）の女性の半生を描いた物語である。彼女は五人の漢人男性と結ばれるが、結婚や出産などのライフイベントに際しては、自身の価値観に基づき主体的に行動する。

ところで、本作に関する先行研究を概観すると、しばしば二元対立で論じられ、家父長社会対母系社会、文明対未開などといった観点が見られる。例えば、黄聖閔は「男性的な覇権／女性的な包容、陽性／陰性をマッチアップすることにより、漢人社会（文明社会）と平埔族社会の二元対立を表現する<sup>7</sup>」と指摘している。だが、作品を貫く基調が異なる二つの社会の対立のみで結論付けしてよいのかどうか、なお検討の余地があるように思われる。また、彼女の人生に影響を及ぼしたであろう五人の男性（夫、恋人など）に関しては、さほど深く言及されていないくらいがある<sup>8</sup>。

かつて、シモーヌ・ド・ボエヴォワールが語った言葉を反芻せずにはいられない。「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」。女性という存在は生得的なものではなく、社会で伝承された習慣や禁忌などによって人為的につくられたものだと説いた<sup>9</sup>。出自が母系社会でありながら、奉公や通婚により漢族の周縁部で生きる主人公はいかなる過程をたどり、どのような価値観を持つ女性となっていくのだろうか。

---

キーワード：台湾平埔族シラヤ族、エスニシティ、母系社会、同化、価値観

\*平成27年度生 比較社会文化学専攻

本稿では、主人公と五人の男性の関係性を明らかにしたうえで、個別に彼らの形象について考察する。また、結婚などのターニングポイントにおいて、主人公のくだした決断に注目しながら、その価値観をも検討していく。そして、これらの考察を通して、二元対立論以外の新たな読み方を明示できるよう試みる。

## 2. 台湾の原住民族について

本論に入る前に、いささか冗長となるが、台湾の先住民族の歴史や概況を説明する必要があるだろう。先述したように、現在の台湾を構成している民族を示すものとして「四大族群<sup>10)</sup>(エスニックグループ) という表現がある。そのうちの一つの先住民族とは、言語学上はオーストロネシア語系 (Austronesian) に分類される先住少数民族である。遡ること1684年より1895年、清朝は統治下の先住民を「熟番」、統治外の先住民を「生番」、統治に入って間もない漢化の度合いが低い先住民を「歸化生番」(化番)と呼んだ。「番」は野蛮であることを意味し、そして「生」と「熟」は「教化」(漢化)したことと、「服属して納税する」か否かを判断の基準として示すものである<sup>11)</sup>。

1895年、日清戦争に敗れた清朝は下関条約によって台湾を日本に割譲したため、台湾は日本の植民地となった。日本統治当初、台湾総督府は清朝の二大カテゴリーを踏襲しつつ統治下の先住民を「生蕃」「熟蕃」として区分し、行政的な扱いに差異を設けていたが、名称の侮蔑的な印象を避けるため、1935年になって「高砂族」「平埔族」と変更した<sup>12)</sup>。

中華民国政府に接收された戦後の台湾において、「山地同胞」「高山族」などの名称で呼ばれてきた。1980年代から高まった先住民権利促進運動のなかで、こうした呼称に対して異議を唱え、自らの手で民族としての呼称を定めようとする「正名運動」が起きる。その結果、1994年には第三次憲法改正によって「台湾原住民」が公式呼称として定められた。さらに、1997年には「台湾原住民族」に改称されたのである<sup>13)</sup>。本稿ではこのような経緯をふまえ、これ以後は「原住民」もしくは「原住民族」の表記で統一する。

今日の台湾の族群概念において、原住民族の二大分類として「高山族」と「平埔族」に区分されており(表1<sup>14)</sup>参照)、後者の平埔族は漢化の進んだ原住民族を意味する。通婚などにより、その子孫の圧倒的多数は漢人と同化、融合してしまっているため、現在ではグループの大半は消滅に至り、個別の言葉や文化をほとんど残していない<sup>15)</sup>。なお、主人公の潘銀花は平埔族の一支族シラヤ族である。

表1 高山族、平埔族の分類(2016年8月現在)

高山族	アミ、パイワン、タイヤル、タロコ、ブヌン、プユマ、ルカイ、カナカナブ、ザキザヤ、ツォウ、サイシャット、タオ(ヤミ)、サオ、クヴァラン、セデック、サアロア
平埔族	ケタガラン、カバラン、タオカス、バゼツへ、パポラ、ホアニャ、シラヤ、バブザ、マカタオ

## 3. なにゆえ書くのか——原住民にむける葉石濤のまなざし

前節では台湾の原住民族の概略について検討した。ところで、文学の世界において、彼らはどのように描かれてきたのだろうか。本節では、『シラヤ族の末裔・潘銀花(葉石濤短篇集)台湾郷土文学選集IV』と同様に、シラヤ族が登場する幾つかの作品を紹介する。そのうえで、本作の執筆動機などについて考察を進める。

### 3-1. 原住民を題材にした文学作品について

王幼華(1956~)の『土地与靈魂』<sup>16)</sup>は、宜蘭地区における漢人移民と平埔族の人々の交わり(通婚、信仰など)にスポットをあてた長編小説である。葉伶芳(1961~)の『鴛鴦渡水』<sup>17)</sup>では、泉州出身の漢人女性が台湾に渡り、奮闘する移民生活を主題に据えた物語が展開されている。この二作の主人公はともに漢民族であり、シラヤ族は脇役として登場する。また、王家祥(1966~)の『倒風内海』<sup>18)</sup>は、オランダ植民地時代におけるシラヤ族の人々の命運を描く。だが、主に男性目線で語られ、母系社会独自の価値観については触れられていない。

以上、原住民族が登場する幾つかの作品を取り上げたが、それらと比べて、『シラヤ族の末裔・潘銀花(葉石

濤短篇集) 台湾郷土文学選集Ⅳ』はどのようなオリジナリティーを持った作品だろうか。本作の特色として、主人公がシラヤ族の女性であることと、母系社会に基づく彼女の生き方が物語の中核をなすという二点があげられる。例えば、陳秀卿や林玲玲らは、「台湾の小説作品において、これまでになく平埔族シラヤ社会の内実をより多く表現し、かつ整った内容が盛り込まれている<sup>19)</sup>」との評価を提示している。また、彭瑞金によると、「シラヤ族の女性潘銀花を描いたストーリーは、多民族文学の創作の先陣をきったといえよう。〔中略〕台湾文学界における新たなジャンルの出現でもある<sup>20)</sup>」と述べている。これらの見解からもわかるように、シラヤ族の存在に焦点をあて、より詳しく描いた点が評価されている。さらに、台湾の多元性を尊重しようとする文学界の思潮の流れがあることもうかがい知れよう。

### 3-2. 原住民に寄せる関心及び執筆動機

最初に葉石濤が原住民にむける関心について考察する。葉はかねてより原住民に注目していたようだ。日本植民地時代に生まれ育った葉は、台南二中の時に博物学の金子壽衛男先生と出会う。金子先生が主宰している「博物同好会」に参加し、毎週、日曜日になると発掘調査に同行していた。そこで原住民族の残した彩陶や石器などを発掘し、原住民に興味を持つきっかけとなった<sup>21)</sup>。

五十年代の白色テロの嵐が吹き荒ぶ時代に、葉は政治犯として逮捕されることとなる。釈放後、小学校の臨時教師の試験に合格するが、しかし、もと政治犯であるゆえに、原住民族の居住地域である辺鄙な山奥に配属される。そこでは、貧しいながらも素朴な原住民たちとの温かな交流があったと後に述懐している<sup>22)</sup>。時は流れ、九十年代に入り、葉は台湾の原住民族によりいっそう強い関心を抱くようになった。司馬遼太郎の『台湾紀行』(朝日新聞社、1994年)や『アジア読本 台湾』(河出書房新社、1995年)の中から、台湾原住民に関するエッセーや論文を翻訳している。中島利郎は「台湾社会の「多民族移民社会」という視点を通して、次第に台南の地に住むシラヤ族一女性に収斂していき<sup>23)</sup>」、本書のヒロイン潘銀花となったのではないかと指摘している。

では、葉石濤はどのような思いをこめて執筆したのだろうか。自身が語った動機を見てみよう。

潘銀花は伝統的な母系社会の象徴であると同時に、豊穡な台湾の大地の象徴でもあった。彼女は大地の母である。彼女は各時期に台湾にやってきた移民を受け入れ、彼らと結合することによって無数の台湾人の子孫を残した。潘銀花は自らの意志により阿豊(銀花の長男—筆者注)を抱いて龔家を離れるが、これはシラヤ族伝統の母系社会に基づく考え方がそのような行動を取らせたのであり、彼女はすべての子供は母親に属すが、父親はさほど重要ではないと考えていた。潘銀花は豊穡な台湾大地の母であるばかりでなく、漢民族の伝統的な封建制度に反抗する強き逞しい女性でもあった。彼女は福佬人(第二次世界大戦終結前までに対岸の福建省から入台した漢族—筆者注)の性的道具となるのではなく、女性が主体となる自由な性を求めたのである。銀花は戦前戦後あわせて生涯に五人の男を経験した。戦後は新移民の外省人を入り婿とし、二人は仲睦まじく暮らすが、夫に対する態度は横暴であった。これも母系社会の特徴をはっきりと反映している。この他にも戦後の歴史的段階を描写するために、作中に二・二八事件や白色テロが台湾人の生活に与えた影響を反映させた。この小説において、平埔族が歴史から消失してしまった経緯が理解できるであろう<sup>24)</sup>。

主人公に付与されたのは「豊饒なる台湾の大地の母」や「封建社会に立ち向かう反抗者」としてのシンボルだけではない。同時に、彼女にシラヤ族が漢人と同化していく過程や、台湾の現代史(日本植民地時代や二・二八事件)を語らせていることも自明であろう。

台湾の原住民族の概略及び本書の創作背景などを把握したうえで、次節よりいよいよ作品の具体的な内容の検討に入る。

## 4. 半生の道のり

本節では、シラヤ族の信仰や母系社会などについて概説したうえで、銀花の半生の軌跡をたどる。

物語の時代背景は、日本統治時代にはじまり、戦後をむかえ、二・二八事件を経た1950年代頃までである。

十六歳のシラヤ族の少女、潘銀花は新店（現台南県新市）にある全人口八十人余りの小さな部落に住む。一族は「この二、三百年来キリスト教を信仰しており、祖廟さえも建てていない。九月十六日になると阿春庇姨（巫女）に率いられ、知母義部落へ行き阿立祖の生誕祭典に参加<sup>25</sup>」する。一族はみなキリスト教徒で、日曜日には村の集会所で礼拝を行うが、しかし何か悩み事がある時には、阿春庇姨をたずねて占ってもらおうという。

作中のこの描写は実情に基づくものである。シラヤ族は古来よりご神体の「壺」を祀る。ご神体を「Arit」と呼び、漢字では「阿立祖」と書く。阿立祖は彼らの祖先であり、母系社会のシラヤでは女性だとみなされている<sup>26</sup>。オランダ時代にキリスト教の布教により、シラヤ族の多くはキリスト教に教化されてしまったが、独自の信仰も守っている。なお、庇姨とは阿立祖と人間の交渉を仲立ちする役割を担うシャーマンである<sup>27</sup>。

また、シラヤ族は母系社会だといわれているが、清朝の史料にその記述を見ることができる。『裨海紀遊』<sup>28</sup>には、「男を生むことを重んぜずして、女を生むことを重んぜしむ。家園はもとより児郎に与えず」とある。『諸羅県志』<sup>29</sup>にも、「女を生むことを重んじ、入り婿を迎える習わしがある。また、父親の家系には属さない。ゆえに女が生まれると「もうけがある」と言い、すなわち喜ばしいことである。男が生まれても入り婿となるので、「損をする」と言われる」とある。さらには、清国時代に交わされた土地売買契約書にもその痕跡をうかがい知ることができ、土地の継承者の大半は女性が占めている<sup>30</sup>。

次に、言語使用状況を見てみよう。この頃には、銀花は一族と同じように固有の言語をほぼ話せず、Ma（父親）、Na（母親）、Uran（雨）など簡単な単語がわかるだけであった。実家は小作農であり、台南の大地主である龔家から畑を借りているが、小作料を納めた後はほとんど残らず、むろん生活は楽ではなかった。

ある時、狩猟中に足をけがした龔家の二少爺（若だんな）、英哲を助けたことがきっかけで、龔家へ奉公することとなる。やがて二少爺と恋仲となり身ごもる。龔英哲から求婚されるが、長男阿豊を出産後、銀花は乳飲み子を連れて龔家を出奔する。その後、いったん実家に身を寄せ、男やもめの王土根と結婚する。しかし、仕事のさなか米軍の空爆にあい、王は命を落としてしまう。

未亡人となった銀花は王土根の残した財産や畑仕事で生計を立てながら、阿豊と王の連れ子の招治の子育てをする。時代は移り、二・二八事件が起きた際に、政治に疎い銀花は逃走中の若者朱文煥をかくまう。だが、二人が結ばれた翌日には朱は連行される。それから一年が過ぎようとした頃、ある日、畑仕事をしていた時に、銀花は見知らぬ外省人の兵士に犯され、妊娠してしまう（後に出産し、阿松と名づける）。母親のすすめもあり、紹介された外省人汪書安と再婚する。

こうして、潘銀花は五人の男と関係し、三人の子供を育てるかたわら漢族の義姉妹らとともに商店を営む。使用人も加え、十一名の大家族の主となった彼女は自らの言語をほとんど失っているが、シラヤ族の末裔として逞しく生きる精神と肉体は受け継いでいるのである<sup>31</sup>。さらに、異なる出自の人々が大家族として暮らす設定にも注目したい。そこには多民族社会である台湾の縮影をみることができよう。

## 5. 五人の男たち

ある時、銀花は来春姨に運勢を占ってもらおう。すると、来春姨には五つのUttin（男根）が見え、そのうちの二つはたちまち消えてしまったという。「銀花は自分の人生の中で、五人の男が存在していることがはっきりとわかった<sup>32</sup>」。本節では、これまでさほど言及されていない五人の男の形象及び銀花の人生に与えた影響を中心に考察する。

### 【一人目の男・龔英哲または二少爺（閩南人）】

潘銀花の初恋の相手である。ひかれあう二人は主僕関係ではあるが、母系社会で育った銀花には階層や性差の区別が存在しておらず、人間関係の捉え方がフラットである。かたや新式の高等教育を受けた二少爺も銀花を蔑視することはなかった。愛する女性に対し、対等に接する新しい時代の男性像が描かれている。銀花が妊娠したことを知ると、彼はプロポーズをするが、妾になることを嫌がった銀花はその求婚を断り、龔家を出奔する。

時は流れ、未亡人となった銀花は偶然にも二少爺と再会する。彼はすでに家柄のつりあう女性と結婚し、そして再度、銀花に妾となってくれるよう懇願するのであった。

「また一緒に暮らす？でもあなたはもう奥さんをもらったじゃないの？」と、銀花は皮肉っぽく二少爺に言った。

「それとこれは別の話だ。他に一軒家を買って、お前と阿豊をそこに住ませよ<sup>33</sup>。」

彼女への愛情を持ち続けていたとはいえ、二少爺は封建的な父権社会の男性としての側面も持ち合わせていることが明白であろう。

#### 【二人目の男・王土根（閩南人）】

さて、龔家を離れた銀花は子連れで中年のやもめ男王土根と結婚する。王は粗野で醜いが、日本人の軍需工場で牛車を操る仕事をしており、収入はかなり多かったため、銀花は衣食住の悩みもなく満ち足りる日々をすごしていた。だが幸せは長続きせず、王は仕事の最中にアメリカの爆撃機の爆撃にあい、亡くなってしまふ。彼は日本統治期の時代背景を強くにじませた人物である。

#### 【三人目の男・朱文煥（閩南人）】

時は戦後、二・二八事件のさなか、銀花は倒れていたある若者をかくまう。だが、二人が結ばれた翌日には特務に連れ去られてしまふ。

意外にも朱文煥は落ち着いた様子で、しきりに振りむき銀花に感謝を伝えようとした。「銀花さん、どうもありがとうございます。いつかきっと恩返しに来ます。僕のためにいろいろとしてくれたこと、ほんとうに感謝しています。」〔中略〕このように、潘銀花の人生の第三番目の男は、マンゴー畑のはずれ、あたり一面野菊の花が咲き乱れる広野の中に消えていった<sup>34</sup>。

その後、二人は二度と会うことはなかった。朱文煥は主人公のうたかたの恋の相手であると同時に、二・二八事件で政治犯として逮捕された人物でもある。二・二八事件では、台湾を接收した国民党政府により、本省人に対する過剰な殺戮や鎮圧が行われた<sup>35</sup>。かの暗黒な時代の犠牲者の姿を投影して描かれた人物像であろう。

#### 【四人目の男・見知らぬ兵士（外省人）】

銀花と四人目の男は被害者と加害者の関係性であるにもかかわらず、しばらく日が経つと、銀花は寛容的ともいえる思いを抱き始める。

その男はきっと労働者で貧乏な庶民だろうと思った。だって、大陸の人間は「よい鉄は釘にはならず、よい人間は兵隊にはならぬ」とよく言っているから。もしそうだとしたら、彼女に乱暴をはたらいた兵士も極悪人ではなく、餓えのあまり野獣になってしまったのだと彼女は直感的に思った<sup>36</sup>。

この主人公の言動に対し、従来、異なる出自の男性たちを受け入れる大地の母の象徴としてみなされてきた。だが他に解釈はないのだろうか。戦後の台湾では、国民党一党独裁による強権政治の支配が長く続き、葉石濤はかねてより、二・二八事件や白色テロ時代に対する沈痛な思いや義憤を作品に発表してきた<sup>37</sup>。本作においても、主人公が外省人兵士に暴行されるというプロットには、国民党政府に迫害を受けた台湾の過去を暗喩しているという<sup>38</sup>。台湾社会における複雑な民族間感情の葛藤が読み取れよう。

しかしながら、主人公は加害者に対し憎悪の感情を示していない。それはなぜだろうか。台湾は多民族・多文化社会だといえるが、長らくエスニックグループ間には社会的亀裂や歴史認識の対立などの問題も横たわっている<sup>39</sup>。これらは決してたやすく解決できる課題ではないだろう。だからこそ本省人である葉は屈折した心理を抱えながらも、あえて加害者を断罪せず、寛容な精神を示す主人公を描いたと考えられる。多民族共生の道を模索する台湾社会への一つの提案として。

#### 【五人目の男・汪書安（外省人）】

再婚を望む銀花には切実な理由が二つあった。王土根亡きあと、銀花は「長い夜を過す方法がなくなった<sup>40</sup>」ことと、「男手がない中で農業をするにはなにかと不都合であった<sup>41</sup>」からだ。紹介された外省人の汪書安を入婿として迎える。二人の力関係を象徴するようなジェンダー関係の倒置を示す場面を見てみよう。

汪書安は体格が大きく、まるで緑林の人間のように容貌魁偉であった。〔中略〕彼女は彼の柔和な眼が気に入った。その眼は象のように無邪気だったからだ。銀花と向かいあうと、汪書安はもじもじと恥ずかしくて、頭をあげられずまるで花嫁のようであった。確かに彼の立場は花嫁そのものだ。銀花のところへ入り婿になるのだから<sup>42</sup>。

また、「彼女は六分の畑を持っており、まわりの福建人の農民に比べても多かったのもはや社会的弱者ではなかった<sup>43</sup>」。このように、経済的に自立している点も二人の関係性に影響を及ぼしていることは自明であろう。

以上、主人公と五人の男性との関係性及び彼らの形象について考察した。その結果、以下の二点の事柄が明らかとなる。まず注目に値すべき点は、五人の男性は全員漢人であること（作中で登場するシラヤ族の男性は、銀花の父親や兄弟、不特定多数の同族男性のみである）。では、なぜこのような設定にしたのだろうか。葉石濤の創作動機を思い起こしてみよう（本稿3-2参照）。平埔族の子孫が漢民族と同化していく過程を提示する作家の意図が見え隠れする。だが一口に漢人だといっても、五人はそれぞれ閩南人や外省人に分けられる。このように、エスニックグループに細分する理由は何か。李貞元の指摘によると、「葉石濤の小説作品において、階級やジェンダーよりもエスニシティに重点をおく傾向<sup>44</sup>」がみられるようだ。本作の場合は時代背景を表すためにも、五人の出自にこだわる必要があったのだろう。

次に、五人の男は個々が作家から付与された役割を帯びていることが浮き彫りとなった。龔英哲は新旧の二面性を持つ人物として描かれ、王士根や朱文煥には歴史の出来事が投影されている。また、加害者である外省人兵士に対し、善悪などの二元論で断罪していない。作家自身の屈折した思いのみならず、台湾の歴史の過程で集積されてきた民族間関係の複雑さが表出しているよう。

ところで、五人の男との関わりを考察するなかで、主人公は常に自らの意思に基づき決断を行うことも明らかとなった。例えば、相思相愛の龔英哲から求婚されたにもかかわらず、彼女は拒否して龔家を離れる。だが、なぜそのような行動をとるのか。理由や判断の基準には不明点が残る。次節では新たに浮上したこの問題点について検討する。

## 6. 潘銀花の価値観とはいかなるものか

本節では、主人公が結婚の際にくだす決断などに注目したうえで、その背後にある価値観について考察する。繰り返しとなるが、銀花は母系社会で生まれ育った原住民族であり、十六歳以降は家父長制によって成り立つ漢人社会の周縁で生きてきた。むろん、彼女はシラヤ族独自の考え方を持っていたが、漢人社会の影響は受けなかったかどうか、この点に関しても見落とさず注視していく。

初恋の相手である二少爺からのプロポーズを受け、龔家からも手厚い待遇を持ちかけられるが、銀花は承諾しなかった。その理由について見てみよう。

あなたは医者だし、読書人の家柄だから、私とはつりあわないわ。結婚したところで、お互いに面倒なことが増えてしまいそうで、この先も幸せにはなれないよ。〔中略〕それに、わたしの一族はあなたたちの考え方とは違って、Na（父親）は一家の主ではあるけど、Ma（母親）とNa（父親）は全く平等なの。〔中略〕お前を妻にしようと言った言葉にも銀花は心から感動した。でも、それは不可能だということもはっきりと知っていたのだ。たとえ二人の愛情が永遠に変わらなくても、まわりの人たちの心無い言葉や中傷を止めることはできない<sup>45</sup>。

日ごろより龔家の召使たちから陰で「番仔」（野蛮人）と呼ばれ、銀花は腹立たしく思っていた。中野裕也が指摘しているように、「漢族社会には以前から原住民族に対する根深い偏見と差別も存在していた<sup>46</sup>」とは、この状況を指し示しているのであろう。銀花には明確な階層による区分が存在しなかったからこそ、両者に横たわる懸隔を敏感に感じ取り、差別に対する反発心もあったと思われる。

第二の理由として、妾としての手厚い待遇を持ちかけられても、「家畜と同じように飼育されている生活にな

りかねない。むろん家畜には餌の心配はないだろう。でもそれは自分が働いて得たものではない<sup>47</sup>」と考え、「両手を動かし自ら働いてこそ天地に恥じないシラヤ人<sup>48</sup>」とも思っていた。彼女にはシラヤ族としてのプライドや進取に富む気性が培われており、自立志向や自尊心の高さがうかがえよう。これらは主体性のある生き方の原動力となったのではないだろうか。

だが、漢民族思想の影響を全く受けなかったのかというと、そうではないようだ。次に別の角度から銀花の考え方を検討してみよう。一人目の子供を出産した際には、ためらいもなく長男を連れて龔家を出奔する。彼女はシラヤ族の考えに基づき、「この子は自分の子供であるということこそが何より重要なこと<sup>49</sup>」とし、子供の親権は母親に属すると捉えていたからにはほかならない。

しかし、さらに詳しく見ていくと、銀花は非常に子供の性別にこだわっていた。「女の子なら龔家に返してもいいが、でも阿豊は男の子だからそうはいかない<sup>50</sup>」。また、五人目の男汪書安と結婚する前の協議では、「もし男の子が生まれるなら潘姓とする。女の子なら汪姓でいいわ<sup>51</sup>」と伝えた。前述のごとく、母系社会においては女性が上位を占め、女の子が生まれることが重んじられている。だが銀花の価値観の中には、封建的な漢人社会にみられる男尊女卑の考え方も含まれており、ゆえに母系社会独自のものを固持しているとは言いがたい。

これまで、銀花は父権社会に対抗する母系社会のシンボルとみなされ、本作はしばしば二元対立で論じられてきた<sup>52</sup>。むろんその一面も含まれていよう。しかしながら、主人公の言動には漢族の影響を受けていることがほの見えるため、作品の基調を二元対立であると決め付けるのは、いささか釈然としない。葉石濤が作中で提示しようとしている、平埔族が漢民族に「同化」される過程とは、単に通婚によるものだけなのだろうか。思考、精神面においても漢族の影響を受けつつ、「融合」されてゆく側面をもはらむのではないだろうか。だとすると、主人公の価値観はもはや母系社会固有のものではないことが露呈する。

本節では、主人公の価値観を明かすべく、結婚の際にくだす決断や親権を中心に考察した。その結果、主人公は母系社会独自の考え方やシラヤ族としての誇りを持つ一方、子供の性別について強くこだわるなど男尊女卑の考え方も持ち合わせていた。従来、銀花は父権社会の対極にいる母系社会の代表だとみなされているが、彼女の価値観には揺らぎやファジーな部分が内包していることは明らかであろう。

## 7. おわりに

本論では、主人公と五人の男性との関係性を個別に考察したうえで、これまで深く言及されていなかった彼らの形象や、個々に付与されている役割を明らかにすることができた。その関係性には台湾の歴史が投影されており、また、多民族社会に潜む民族間感情の複雑さが表出されている。さらに、結婚などのターニングポイントにおける主人公の判断の理由に注目し、そこから彼女の価値観を明示できるよう試みた。考察の結果、出自が母系社会である主人公は人間関係において截然たる階層による区分は存在しておらず、自尊心や自立志向を高く持っているため、自己の生き方を自ら選択する人生を可能にした。

しかしながら、他方では漢族思想の影響とおぼしき男尊女卑の傾向も見られる。従来、主人公は封建的な父権社会に対抗する女性だと評されてきたように、その一面を否定することはできまい。しかし価値観などの内面的な部分において、漢族の影響を受けていることも確かのようなのだ。また、原住民の銀花が外省人の夫や漢族の義姉妹らと共に大家族として暮らす設定には、多元社会の縮影を見ることができよう。ゆえに作品を貫く基調は二元対立論ではなく、むしろ異なるエスニックグループの同化や融合とみなせるのではないか。主人公のアイデンティティーや民族帰属意識については、引き続き今後の課題としたい。

### 【註】

1. 葉石濤 (1925-2008) は、一九四三年、日本統治時代に文壇デビューして以来、亡くなる前年まで創作活動に勤しんだ。詳しくは、戸田一康「葉石濤作品に見られる日本文学の影響—太宰治を中心に—」(『日本台湾学会会報』第八号、2006年、108-122頁)を参照されたい。
2. 一九五一年、「反乱平定時期スパイ検挙条例」の「知匪不報」(スパイを密告しない)という罪状で五年の有期徒刑の判決を受ける。
3. 葉石濤「構成台湾文学的三要素」(台湾新聞報、1999年7月1日)

4. 原住民族、客家人、閩南人(福佬人)、外省人をさす。王甫昌『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』(東方書店、2014年、51頁)
5. 例えば、『臧首』(派色文化出版、1991年)、『異族的婚礼』(皇冠文学出版、1993年) などがある。
6. 葉石濤著、中島利郎訳『シラヤ族の末裔・潘銀花(葉石濤短篇集)台湾郷土文学選集IV』(研文出版、2014年)。原著は、葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』(草根出版、2000年)。内容は以下の通りである。「西拉雅族的末裔」、「野菊花」、「黎明的訣別」、「潘銀花的第五個男人」、「潘銀花的換帖姐妹們」。最初の四作は、1990年に『西拉雅末裔』と題して前衛出版社から出版された。その後五作目書き足されて、『西拉雅末裔潘銀花』と改題され出版された。なお、本稿で使用するテキストは『西拉雅末裔潘銀花』に拠る。
7. 黄聖閔「論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的後殖民論述」(第三十四届南区八校中文系碩博士生論文研討會論文、2015年)
8. 徐国明「女性性慾の再現與批判—析論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的種族、性別與台湾意識」(『台北教育大学語文集刊』第14期、2008年、239-262頁) など
9. シモース・ド・ポーヴォワール『第二の性』(新潮社、1959年)
10. 現在、研究者は「族群(ethnic groups)」について以下のように定義している。「族群とは共通の起源、あるいは祖先・文化・言語を有する集団である。そのために、その集団の成員はみずから、あるいは他者から、独自の社会集団を構成する一員であると認識し、また認識されている状態を指す。」詳しくは、前掲書『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』、15-16頁を参照されたい。
11. 周婉窈著・濱島敦俊監訳『図説 台湾の歴史』(平凡社、2007年、30頁)
12. 綾部恒雄監修、末成道男ほか編『世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在—01 東アジア』(明石書店、2005年、110頁)
13. 八木橋伸浩「台湾原住民族角力事情覚書」(『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第七号、2014年、32頁)
14. 台湾行政院原住民族委員会公布資料をもとに筆者作成。原住民族委員会全球資訊網ウェブサイト<http://www.apc.gov.tw> (2016年8月19日筆者閲覧)
15. 日本統治時代にはすでに彼らの生活は漢人とほぼ同様で本来の姿が失われ、祖先祭祀などの時に伝統的な姿の一端が示されるのみとなった。殷允芃編、丸山勝訳『台湾の歴史—日台交渉の三百年』(藤原書店、1996年、102頁)
16. 王幼華『土地と靈魂』(九歌出版、1992年)。邦訳、石其琳訳『土地と靈魂』(中国書店、2014年)
17. 葉伶芳『鴛鴦渡水』(皇冠文学出版、1997年)
18. 王家祥『倒風内海』(玉山出版、1997年)
19. 陳秀卿、林玲玲「発現平埔—葉石濤与西拉雅族書写初探」(『黃埔學報』第六十四期、2013年、135頁)
20. 彭瑞金「出入人間鍊火—葉石濤集序」、『葉石濤集』所収(前衛出版、1991年、12頁)
21. 葉石濤「彩陶」(中華日報、1989年1月28日)
22. 葉石濤「葛瑪蘭的凄風苦雨」(民衆日報、1990年12月1日)、「我和泰雅族」(民衆日報、1998年2月8日) など
23. 前掲書『シラヤ族の末裔・潘銀花(葉石濤短篇集)台湾郷土文学選集IV』、234頁
24. 葉石濤「発現平埔族—我為什麼写『西拉雅末裔潘銀花』」(『文訊』一七八集、2000年)
25. 「西拉雅族的末裔」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』所収、12-13頁。なお、本稿の日本語訳はすべて筆者によるものである。
26. 前掲書『図説 台湾の歴史』、32頁。及び、葉春榮「葫蘆福老裔漢人的祀壺信仰」、黃応貴・葉春榮編『從周辺看漢人的社会与文化』所収(中央研究院民俗学研究所、1997年)
27. 前掲書『シラヤ族の末裔・潘銀花(葉石濤短篇集)台湾郷土文学選集IV』、235頁
28. 郁永河『裨海紀遊』、台湾文献叢刊第44種(台湾銀行經濟研究室、1962年、44頁)
29. 周鍾瑄『諸羅県志』、台湾文献叢刊第141種(台湾銀行經濟研究室、1962年、169頁)
30. 林玉茹編『台南県平埔族古文書集』(台南県政府、2009年、62-64頁及び180-210頁)
31. 中島利郎ほか編『台湾近現代文学史』(研文出版、2014年、301頁)
32. 「野菊花」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』所収、63頁
33. 「野菊花」、同上書、59頁
34. 「黎明的訣別」、同上書、81頁
35. 詳しくは、伊藤潔『台湾』(中央公論新社、1993年、137-162頁)を参照されたい。
36. 「潘銀花的第五個男人」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』所収、91頁
37. 葉石濤『紅鞋子』(1989年、自立報社)、『台湾男子簡阿淘』(前衛出版、1990年) など
38. 蘇淑瑜ほか「訪葉石濤」(『台湾新文学』、1996年、252頁)
39. 何義麟『台湾現代史』(平凡社、2014年、238頁)
40. 「野菊花」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』所収、57頁
41. 同上、63頁
42. 「潘銀花的第五個男人」、同上書、97頁
43. 同上、84頁
44. 李貞元「論葉石濤小説中的〈台湾女人〉」(台湾時報、1994年7月18日)



45. 「西拉雅族的末裔」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』、35頁
46. 中野裕也「台湾原住民文学のパイオニア：トパス・ダナピマの世界」(『藝文研究』62号、慶應義塾大学藝文学会、1993年、134頁)
47. 「西拉雅族的末裔」、前掲書『西拉雅末裔潘銀花』所収、40頁
48. 同上
49. 同上、38頁
50. 「野菊花」、同上書、49頁
51. 「潘銀花的第五個男人」、同上書、97頁
52. 前掲論文「論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的後殖民論述」のほかにも、林沈雁「葉石濤小説女性書写研究」(国立屏東教育大学中国語文学碩士論文、2009年)などを参照されたい。